創建、発展を論述の重点としたものである（一七九頁）。

本編においても固有名詞は漢字でのみ表記されているが、これはやはり改善の余地があろう。例えば、青海蔵族史上の西納氏一族について、西納則覚や西納貝本の如き人名の原語を即座に答えることのできる初学者は決して多くあるまい。Zi na Rise jo, Zi na Dpal 'bum とローマ字表記を併記して欲しいものである。なお、欧文の文献についても、原題と原載誌名を示すべきである。

第三編はまさしく中国歴史学界の回顧と展望とも言うべきものである。ここには中国歴史学界が過去に挙げた夥しい研究業績と将来へ向けての研究課題が具体的に提示されている。国外の青海民族史研究者としても本編の内容を知悉しておかなければならない。その意味で本書は世界中の青海民族史研究者の座右の書となるであろう。

本叢書は本書を皮切りに第一期分として、今後『満族史入門』、『渤海史入門』、『甘粛民族史入門』、『吐谷渾史入門』、『衛拉特蒙古史入門』の刊行が予定されている。それらの順調な上梓を切に祈るものである。

（新書版　二五九頁　一九八七年八月
青海人民出版社　一・六〇元）
（若松　寛　京都府立大学文学部教授）

新宿区教育委員会編
『新宿区地図集――地図で見る新宿区の移り変わり――』
『地図で見る新宿区の移り変わり』（全五冊）

本成果は、新宿区に関わる絵図・地図を整理・編集した地図集である。資料として区立中央図書館が収集した郷土資料・行政資料の地図類を中心に、国立国会図書館などの所蔵する地図類が使用されている。

前者『新宿区地図集』（一〇五頁、図版二八点）は後者五冊に先立ち、昭和五四年に出版された。新宿区全体を表現する絵図・地図を収めている。これらの絵図・地図は時代別に、Ⅰ．江戸時代、Ⅱ．明治初年から関東大震災まで、Ⅲ．関東大震災から太平洋戦争まで、Ⅳ．太平洋戦争後、の四期に整理・分類されている。続いて各絵図・地図に関する解説が成されている。巻末には、新宿区関係の地図目録（江戸時代以降）が付され、本書に収められなかった絵図・地図の存在を知ることができる。

後者『地図で見る新宿区の移り変わり』は区内各地域に関する地図集で、五冊より成る。すなわち牛込編（昭和五七年発行、五〇三頁、図版一〇二点）、四谷編（昭和五八年、六一五頁、図版一一五点）、淀橋・大久保編（昭和五九年、四八〇頁、図版一〇六点）、戸塚・落合編（昭和六〇年、五四九頁、図版一一五点）、そして索引編（昭和六二年、一〇八八頁）の五冊である。

まず索引編以外の四冊は、それぞれ区内各地域の地図及び解説で構成される。地図に関して、近世の切絵図・町絵図・村絵図や近代の区全図（四谷区・牛込区）など一般図だけでなく、近代の地籍図・土地宝典など主題図も時代順に幅広く収めている。次に解説に関しては、所収地図の解説だけでなく、当該地域の「町とくらし」についての論文・エッセイを四五編（牛込編九、四谷編一二、淀橋・大久保編一二、戸塚・落合編一二）収めており、これらの地図集を興味深いものとしている。たとえば、福

田アジオ「高田富士と落合の火葬場――江戸の周縁としての戸塚・落合――」（戸塚・落合編）、北原進「市谷薬王寺と門前町の成立」（牛込編）、西沢爽「はやり唄と新宿」（四谷編）などである。

次に索引編には詳細な五十音索引・町区域索引が作成・所収されている。五十音索引は、各地図に表記される項目すべてを五十音順に整理し、分類項目（例、武家屋敷、町人拝借地）・町区域・年代・収録個所・参照項目を列記する。町区域索引は、五十音索引項目を一五三の町区域ごとに分け、時代別・土地利用別に編成する。いずれも編者の労が生きていると思われる。

また、この索引編にも解説が付されている。すなわち「索引から見た新宿区」（近世・近代）論文二編、及び「町とくらし」に関するエッセイ九編である。

以上、概略を紹介した。最後に本成果の意義を三点指摘しておく。

第一に、急激な変貌を遂げる大都市江戸・東京の過去の景観を記録した点である。とりわけ副都心として景観変化の著しい新宿区において本成果が得られたことは重要である。

第二に、小地域単位（牛込、四谷など）で年代順に絵図・地図を並べることにより、景観変遷が一目瞭然となった点である。すなわち詳細な土地利用の変化が看取される。

第三に、絵図・地図が地域を考える際、重要であると認識させた点である。近年、市町村史でも、この傾向が指摘できる。

いずれにせよ本成果は、歴史学・地理学などの研究だけでなく、都市計画や郷土学習などにも貴重な労作である。

（『新宿区地図集』　一九七九年三月　特別頒布価格一三〇〇円　『地図で見る新宿区の移り変わり』全五冊　一九八二年三月～一九八七年八月　いずれもA4判）

（内田忠賢　京都大学大学院生）

受贈図書

（一九八六年一一月一七日～一九八七年七月一四日）

鹿児島経大論集　二七―三、二八―一
アメリカ史評論（関西アメリカ史研究会）四、五
駿台史学（駿台史学会）　六八
国際文化論集（西南学院大学学術研究所）一―一
歴史学と歴史教育（近畿大学）　三二
人文学科論集（鹿児島大学法文学部）　二四、二五
一橋研究（一橋大学大学院）　一一―二、三、四
韓国史研究彙報（ソウル国史編纂委員会）五四
神道史研究（八坂神社神道史学会）　三三―四、三四―四
史学科報告（鹿児島大学教養部）　三三
ごるゴ（朝鮮社会科学院図書館）　一〇
大津市史（大津市役所市史編纂室）　九
文明（東海大学文明研究所）　四八
古代史研究（立教大学古代史研究会）　五
史朋（史朋同人）　二三
神道古典研究会報（神道大系編纂会）　八
紀尾井史学（上智大学大学院史学専攻院生会）　六
三康文化研究所所報　二一
湘南史学（東海大学大学院日本史学友会）七・八合併号
経済論究（九州大学大学院経済学会）　六六
富士論叢（富士短期大学学術研究会）　三一―二
産業社会論集（立命館大学産業社会学部）